

Title	三つの指輪
Sub Title	The three rings
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.4 (2006. 3) ,p.109(429)- 111(431)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三つの指輪

坂口昂吉

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教は、その成立の歴史的由来についても、聖典の多くを共有する点においても、唯一の神とその教えを奉じる意味でも、相似た宗教である。ただ残念ながら互いに仲が悪い。この三大宗教の不和が現代の国際紛争の火種になっている、とさえ言われる。確かに古くはユダヤ教がキリスト教・イスラム教の成立を妨げたし、キリスト教とイスラム教の間には十字軍戦争という忌まわしい記憶もある。しかしその反面、ヨーロッパの歴史をみると、すでに中世から三つの宗教が兄弟である、という意識が芽生えている。ここに紹介する「三つの指輪」という話はその代表的なものである。

この話が最初に登場するのは、一三世紀の物語集『ノヴェリーノ』や『ゲスタ・ロマノールム』の中である。

しかしそれが広く知られるようになったのは、ルネサンス期の文人ボツカチヨ（一三三三—一三七五）の『デカメロン』に収録されてからである。ここに「三つの指輪」の要旨を述べてみよう。

バビロニアにサラディーンというイスラムの君主がいた。彼は戦費の調達に苦勞して、アレクサンドリアのメルキセデクというユダヤ人の金貸しに目をつけた。しかし、けちなユダヤ人は金を貸してくれそうもなかった。そこでサラディーンは一策を案じた。彼はメルキセデクを呼んで質問をした。「世界の三大宗教であるユダヤ教・キリスト教・イスラム教の中で、真理を語っているのはどれかね。」サラディーンは、メルキセデクがユダヤ教と答えれば、支配者である自分の奉じるイスラム教を誹謗した罰として、彼から強引に金を取り立てるもく

ろみであつた。

すると賢いユダヤ人はその問いには直接答えず、ある物語をイスラムの君主に語つたのである。「昔三人の息子をもつ、大金持ちの老人がいました。彼は先祖伝来の貴重な指輪を持っていましたが、職人に命じてそれとそっくりな指輪を二つ作らせました。それから彼は三人の息子を呼んで、各々にひとつの指輪を与えました。そして自分が死んだらその三つの指輪を付き合わせ、本物を持っていた者が全財産を相続するように、と告げました。父の死後、三人の息子は遺言通り、各々が持つ指輪をくべてみました。いずれもそっくり同じで、いくら調べてもどれが本物か見分けがつきませんでした。」

この話を聞いたイスラムの君主は、ユダヤ人の賢い答えに感服して彼を賞賛した。そして二人は生涯の友となつた。メルキセデクはサラデイーノに金を用立て、サラデイーノはそれを全額返済したのである。

この話で、父親は唯一の神であり、三つの指輪はユダヤ教・キリスト教・イスラム教であり、三人の息子はその各宗教の信者であることは言うまでもない。すると三つの宗教のうち一つだけが先祖伝来の宝と言われているのだから、そののみが神の永遠の所有物である。そして

他の二つは模造品と言われているのだから、歴史の経過の中で作られたものである。だが模造品といつても同一の神を起源とすることに変わりはない。しかも人間の理性によつては真偽の区別がつかないほど優れた作品なのである。したがつて三つの宗教の信者は、共通の神を父とする兄弟であることを自覚するのみならず、一層の敬意をもつて互いに相對すべきなのである。

この「三つの指輪」の物語は、啓蒙期の思想家、レッシング（一七二九—一七八一）の戯曲『賢人ナータン』の中で採択され、一層の完成をみた。ここでメルキセデクは、ナータンという名で登場してくる。また三人の息子が、指輪の真偽を決定すべく、裁判に訴える運びとなる。ここで裁判官は語る。「あなた方はみな、自分の指輪を本物と信じなさい。お父さんはあなた方三人を等しく愛したのです。この三つの指輪のどれにもその愛が秘められているのです。ですから指輪の真偽は措いて、その効力を發揮するよう、清い心で神に仕え、互いに愛し合いなさい。今から何千年の後、私のような人間ではなく、神がこの裁きを決着して下さい。」

この話を聞いたサラデイーノは、「三つの宗教の信者は、衣服と食物、即ち生活習慣を異にするが」と反論す

る。するとナータンは答える。「それはうわべの相違にすぎません。大事な点は三つとも歴史的宗教であることです。」

以上の如く『賢人ナータン』において、「三つの指輪」の話は二つの結論に達している。第一に三つの宗教すべてが神と隣人に対する愛を中心としていることである。第二に三つの宗教は、神が救いのために人間の歴史に介入してくると考える点で等しいのである。もつとも同じく歴史的宗教といっても、キリスト教では、神が預言者を送るだけでなく、神自らが人間となって救いに来る、という特色がある。しかしこのキリスト教独特の教えも、他の二宗教との違いを強調するだけでなく、一層の協調の道を示すよう生かすべきである。そしてこのためにも「三つの指輪」の話に傾聴すべきであろう。